

東京外語大教授

中嶋嶺雄

中国

—1—

東欧諸国の変革を受け、中国と東欧は百八十度路線が違う両極に位置して、ソ連はといえば、中

たことで、一党独裁堅持の中

私はこう見る

## 指導部分裂の可能性高まる

国とソ連の間の亀裂は確実に深まろう。だが、そのことが中ソ対立の再現をもたらすほどの活力と余裕はもはや中ソ間にはない。

東欧の変革に続くソ連の改革・民主化の大きな動きは中國にも強い影響を与えるにはない。最高実力者、鄧小

中国は東欧の変革が起る以前の昨年春、民主化運動が盛り上がった。それが人民解放軍の武力制圧という「天安門事件」で押しつぶされた。もの進展に関する報道が抑制され、改革派の趙紫陽党総書記(当時)が鄧小平氏や李鵬首相を逆に軟禁していたならば、

中国は東欧に先駆けて民主化

会総会が党の指導的役割を定めた憲法第六条の修正に伴う複数政党制への移行を決定し

部分裂する可能性がさらに高まってきたのではないか。

共産党拡大中央委員会

断固拒否の保守派との間で、激烈な権力闘争が展開され内部分裂する可能性がさらに高まってきたのではないか。

国と東欧の中間地點

平(前党中央軍事委主席)以

を具現化していただろう。

の動きをよく知っている。

ルーマニアのチャウシェス

今後、共産党一党独裁を否

ル(大統領)が射殺され、

定して新党を結成しようとの

際、そのニュースを聞き中国

各地で爆竹が打ち鳴らされた

事実がある。中国の民主化勢

力は厳然と存在しており、い

つ爆発しても不思議ではな

い。

改革の動きも必ず出てこよ

う。党指導部内部でも、現

在、江沢民総書記と李鵬首相

の確執の兆候があり、内部分

裂の事態に発展することも十

分考えられる。また趙氏の復

活の可能性も否定できない。

現在、中国ではすでに鄧以後

に向けた大変革が確実に萌芽

(ほうが)しつつあるといつてもよいだろう。

(談)

中嶋嶺雄(なかじま・みねお)一九三六年生ま

れ。東大大学院国際関係論課程卒。国際関係論。